

# 佛 教 と 平 和

上 田 義 文

「佛教と平和」という問題は、重要であるとともに多くの困難を含んだ問題であると思う。私はこの問題の解答を提示するものではなくて、討議のための若干の手掛りを提出するという意味で私の考えを申上げてみたい。

「佛教と平和」という、このシンポジウム第三部會のテーマは、他の二つの部會における四つのテーマ——「民族と宗教」「世界文化と民族文化」「統計より見たる國民性」「國民精神と佛教」——と比べて異つた性格をもつている。その一つとしてまず注目したいのは、このテーマのもつ實踐性である。このテーマは單に知識乃至理論の問題ではなくて強く實踐の領域と結合している。他の四つのテーマは知識の問題として扱ひ得られるに反して、このテーマは、單に知識の問題として論ぜられただけではあまり意味がなく、銘々の主體的な實踐の問題として取りあげられねばならないという性質をもつている。もし「佛教と平和」という題ではなくて、「佛教の平和思想」という題ならば、いちおう實踐と切離して扱え

る。佛教にはどのような平和の思想があるかということはいちおう問題としてよい。「佛教と平和」という標題もこういう意味に解せられぬことはないかも知れぬ。しかし今日「平和」ということが言われるのは、いうまでもなく現在の世界において著しく戦争——人類の滅亡に導くかも知れないような戦争——の危険があるという意味であることはいうまでもない。今日における平和の問題は、平和とは何かという知識の問題ではなくて、いかにして平和を實現するかという實踐の問題である。「佛教と平和」という問題も、今日の平和の實現について、佛教はそれの独自の立場から、どんな貢獻をなし得るかということではなくてはなるまい。殆んど知的關心に終始して、實踐的問題——特に政治的實踐的問題——に關心の薄かつたこの學會にとつて、このテーマのもつ實踐的意味は注目すべきものと思う。

第二には、政治性である。この實踐は、たとい佛教者の實踐であつても、純粹に宗教的實踐(上求菩提下化衆生の修行)

のみに止まることはできないで、必然に政治的意味をもたざるを得ない。従つてこの問題の討議も、單に宗教や哲學の範圍内にとどまつていことができないで、政治的問題にまで出なければならぬ。宗教と政治という問題がこのテーマの核心にある。

第三に現代性である。これは歴史性と言いかえることもできよう。政治の問題はいつでも現代の時代的乃至歴史的問題である。平和の問題が政治性をもつということは、それが時代の問題であることを意味する。これに對して宗教の問題は、いつの時代でも人間が人間である限り問題となるところのものである。それは時代性を越えた問題である。

私たち佛教徒の從來の態度には、社會におけるすべての問題を宗教的立場に歸して考える傾向はなかつたであらうか。問題の時代性即ち現代性を鮮明に把握し、あざやかにそれに對處することに缺けるところがあつたように思われる。その一つの原因は、政治的問題あるいは社會的問題を、それらの問題として把握せず、宗教的立場に歸して、専ら宗教的に見るために、その問題の政治性あるいは社會性を見究めることができず、従つて時代性というものを見失つてしまつて、人間一般の問題——いつの時代でも人間が人間である限り問題となるような問題——として見るからではなからうか。宗教的問題は時代の變遷を越えて、人間の生きている限り、いつ

でも問題であるが、政治的あるいは社會的問題は時代とともに變遷し、嘗ては問題とならなかつたことが今は問題となる。平和の問題はすぐれて時代性をもつ問題である。

第四に社會性である。宗教の問題は個人の問題であり、宗教的實踐は個人の行である。利他の行も、個人の行として行われる。ところが平和の實踐は多くの人の共同の動作として行われる。ひとりひとりが平和の心をもちながら、そういう個人が集つて同一の行動をとり、社會的な運動として行われねばならない。

宗教的眞理は、言うまでもなく、主體的眞理である。道元禪師が「佛道をならふといふは自己をならふなり」と言い、親鸞聖人が「彌陀の五劫思惟の願をよくよく案ずればひとえに親鸞一人がためなりけり」と言つた言葉にそれがよく現れている。聖徳太子の和も個人對個人の和を言つていたのであつて、國家對國家の和の意味ではない。個人の和の心が基礎になつて國家對國家の和も實現されるのではあるが、個人の心の問題としての和を考え、實踐しただけでは、今日の平和の問題の解答としては足らない。問題の社會性あるいは國際性を正確に把握することは、第三にあげた時代性の把握とともに缺くことのできない點であると思う。主體的眞理従つて個人的な和を教える佛教の眞理は、どのようにして社會的な力となり、國家對國家の平和の實現に作用することができる

であろうか。

以上の諸點を考慮して問題を考えてみる。まず念を押しておきたいのは、初めに言つた實踐性である。佛教が他の宗教——ユダヤ教、キリスト教、イスラム教等——に比べて寛容の精神に富み、平和的性格が著しいことは西歐の人びとも認めているところであり、不殺生戒を第一とし、慈悲の精神を基調として、人と争うことを好まず、貪りをつつしみ、怒りを抑え、和顔愛語の心を尊ぶことは人々の周知のとおりである。しかしこういう和と慈愛の精神の強調だけでは今日の平和の問題には答えとならないであろう。このような和の精神が國際間の平和の實現に役立つにはまた別の工夫と實踐を必要とする。問題はむしろその工夫と實踐はどんなものかという點にかかつてゐる。佛教徒は今日の政治の問題にいかに対處するか、政治に對してどんな立場をとるかということが一つの問題である。

これについては政教分離という立場が考えられる。直接に政治的運動に投入することは、必然にある一つの政治的立場をとることであり、それは他の政治的立場と對立し、鬭争することになる。そうなつては、平和のための運動が、却つて對立を助長することになる恐れがある。それは眞の平和に至る道ではない。あらゆる政治的對立を超えた立場に立つことによつて眞の平和へ導くことが可能となる。どんな政治的立

佛教と平和（上 田）

場をもとらないで、ただ佛教の精神を、すべての立場の人びとに伝えることに専念することがよい。それが眞に佛教の立場から平和に貢獻する道であるという主張である。

この政教分離という立場は、それが可能なのは戦争の起つていないとき、即ち平和のときである。平時には宗教家が政治的問題にふれぬことは可能であるが、一旦戦争が始まれば、國家權力によつていやおうなしに協力させられることは、去る大戦によつて十分經驗済みである。單に權力によつて強いられるだけでなく、理論的に考えても、戦争の起つているときに平和を望むことは戦争をやめることであり、戦争をやめるためにはできるだけ早く完全に敵に勝たねばならない。負けることによつて戦争を止めようという考え方は何ら現實性のない夢想である。こういう意味から言つても戦時に協力せざるを得ない。政教分離という立場は平時にのみ可能な立場である。

ところで平時において政教分離の立場をとることは平和の問題に結局ふれないことを意味する。平和の問題は前述のように政治的問題だからである。平時において政教分離の立て前に立つことができるのは、政治問題にふれないで済ますことができるということの意味する。それは今日の問題としての平和の問題に何ら貢獻しないということである。今日は平和を脅かすさまざまな問題がある。それを解決するにはどう

すればよいかに答えねば、平和の問題に貢献するものとは言えない。政治的権力闘争にまき込まれることはあくまで避けねばならないが、政治性をもつ問題であるからという理由で、ただ觸れないでおくというのでは、平和の問題に貢献することはできない。政敎分離という立場は不徹底な曖昧な、従つて眞實とは言えない立場であろう。

佛敎の大悲は、今日の人間の最も痛烈な問題の一つである平和の問題を素通りするものであることはできないであろう。今日の人間の苦惱の救済には、この苦惱からの救済も含まれねばならないであろう。平和の問題はすぐれて政治的問題であるが、その問題が人間の起す問題であるところに、本質的に人間そのものの問題——宗教問題——が含まれていく。政治の問題であるからといつて觸れないでおくのではなくて、同じ問題を、宗教の立場からでなければできないような解決の仕方でも、しかもそういう解決が是非望ましいというような解決の仕方でも扱ふことができる筈であると思われる。平和の問題をただ政治的問題として扱ふのは政治的立場である。佛敎の立場は平和の問題の政治性を見るときにも、そこに絡んでいく人間の問題をも同時に見なければならぬ。政治の問題を、政治性を無視するのではなくて却つて政治性の中に人間性のある問題——憎しみや怒りや傲慢や同情や等々——を問題とすることによつて、政治的解決が届き得ない、

より深い人間性の根本からの解決に努めることによつて、政治的解決よりもいつそう根本的な解決に導くことに佛敎の役割があると思われる。そこで問題はむしろ具體的な個々の問題にどう對處するかという實際問題となつてくるであろう。ここに多くの人々の研究上の協力と、實踐上の協力が必要である。それによつて初めてそれぞれの具體的問題への實際的な解答が與えられるであろう。なぜなら、平和の問題は實踐の問題であるから、發言した人びとが自己の發言に責任をもち、それを實踐に移すことによつて初めてそれは眞の解答と言えるからである。平和と佛敎という問題こそ協同討論のテーマとして取りあげられるべきものであろう。ひとりふたりの人がどんなにすぐれた意見を發表しても、多數の人にそれを實踐しようという決意がないなら、その意見も無意味になつてしまふであらう。はじめに言つたように、實踐性をもつた問題であるから、知識としてどれほど多くの人の間にひろまつても、その知識をもつている人びとの實踐となつて現れねばあまり意味がないからである。そして實踐もひとりふたりがするだけで多數の人がそれを無視してしまふならば、また平和實現の效を期しがたいであらう。この問題の社會性を思わざるを得ない。社會的實踐に弱いという佛敎徒の傳統的缺點がこの問題に顯著に認められるのではあるまいか。